

桑野塾

桑野塾

検索

<http://deracine.foo.jp/kuwanojuku/>

大学などの研究者に限らず、興味を持って研究していることを自由に発表しあう「広場」です。
どなたでもご参加いただけます。
それぞれの興味が少しずつ重なり合うことで、新たな知見を見いだそうという場です。

第58回

2019年
9月28日(土)
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 戸山キャンパス 33号館 431号室

★ どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。

参加無料

☆ 終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(飲食費は別途)

※ 予約の都合上、懇親会参加をご希望の方はなるべく事前にご連絡いただくと助かります。

※ 報告者・タイトルは変更の可能性もあります。ご了承ください。



関口存男とは何者なのか —その生涯を再検証する試み—

報告者：柴田 明子



関口存男(せきぐちつぎお 1894 [明治27] ~ 1958 [昭和33]年)は、ドイツ語学の権威として知られ、数多くのドイツ語教科書、参考書、研究書、翻訳書を公刊しました。ドイツ語教師として大学や語学学校で教鞭を執ったのはもちろんのこと、NHKラジオ講座の講師もつとめ、外務省にも関わっていました。一方で演劇の分野でも活躍し、1917 [大正6]年には青山杉作、村田實、木村修吉郎らと劇団「踏路社」を創立、脚本の翻訳・翻案に当たっています。役者、演出家としても活躍しました。社会活動家としての一面もあって、1945 [昭和20]年、疎開先の長野県妻籠で日本初の表彰公民館となる妻籠公民館の運動を支え、村の青年たちに演劇指導も行いました。勝野金政(かつのきんまさ 1901 [明治34] ~ 1984 [昭和59]年)とも繋がりがあり、関口が妻籠に赴いたのは勝野の招きだと言われています。1930年代に日本で進められたユダヤ難民移住計画(河豚計画)に関口が関わっていたとする記述も残っています。

調べれば調べるほど新たな相貌を現す関口。「ドイツ語のゾندان先生」というイメージに留まらない多様な姿が見えてきました。調査の途中経過を報告します。

●柴田 明子(しばた あきこ)

編集者。『関口存男著作集』(三修社、1994年)を担当。

2018年4月~2019年3月、「関口存男没後60年記念事業『存在の男』展」(三修社)を企画・運営。

『新東京』第一号(昭和5年6月30日発行)より
この時、関口は35歳

ブルリュークの頃のシベリアの紙幣

報告者：鈴木 明

アマチュア研究者は、

プロの使わない二次元資料

(紙幣、絵葉書、地図、パンフ etc)で

大いに愉しむ

●鈴木 明(すずき あきら)

1939年生まれ。日ソ学院でロシア語を学ぶ。ロシア語の機械マニュアル作成に従事。
ロシア・アヴァンギャルドの画家ダヴィッド・ブルリュークの研究者。
共著に「ブルリューク、フィアラの頃の小笠原」(2006年)、
訳書に「パーツラフ・フィアラ著『富士山詣で』(2012年)、
『OGASAVARA』(改訂版2010年)、「上野公園」(2008年)、
ブルリューク著「大島」(2001年)、「海の物語」(2003年)など。

